

＜今日の説教のポイント 創世記1～3章＞

1 創世記1章前半 世界は神様によって造られた！

聖書の最初「創世記」は、その名の通り、神様が6日間で世界を造られた話から始まります。「そんな馬鹿な。24×6時間ですごくできたなんて」と思うかもしれません。その通りです。これを記した人たちもそんなことは思っていません。彼らが伝えたかった（神様が彼らを用いて伝えようとした）ことは、「世界は偶然にできたのではない。全能の唯一なる神様が造られたのだ。だから、この世界と私たちの人生は決して意味なく空しいものではないのだ」ということなのです！

2 創世記1章後半～2章 人間の意味と使命。

聖書には、「人は神様にかたどって造られ、全ての被造物を支配せよと命じられた」（1:26-28）と記されています。「かたどる」は外形が似ているという意味ではなく、人は神様と語り合えるという内的なことを言っています。また、「支配する」はしたい放題できるというようなことではなく、全てが共存できるように管理する務め（スチュワードシップ）を意味しています。聖書の神様が人間一人一人に託された使命があることを知るとき、私たちの人生の捉え方も変わります。

3 創世記3章前半 人間の現実の姿：正しい人は一人もいない。

アダムとエバが蛇に騙されて善悪を知る木の実を取って食べてエデンの園から追い出される話は「私の罪の源」を示す話、つまり今の私たちの罪を蛇やアダムとエバに責任転嫁できるような話ではありません。そうではなくて、私たちの中に罪を犯さない人はいないという事実を伝えようとした話、物語なのです（歴史書ではない）。ここで大事なことがあります。「罪」と訳されたヘブル語の原語は「矢を射るが的から外れた方向に飛んでいる」を意味しています。一生懸命生きていても（矢を射る）、造り主なる神様（的）から外れた生き方をしている、それが「罪」と訳された原語が意味していることなのです。

4 創世記3章後半 罪人を見捨てない神様！

この物語の最後が重要です。アダムとエバはエデンの園から追放されます。しかし、そこに神様の思いやりが沢山盛られていることを見逃してはなりません。聖書の神様は罰して終わりではなく、気づき、神様に立ち返ることを願われている神様なのです（ルカ15:11以下）。